

新宿の街に出て三時間経っても、瑠璃子  
は一枚も写真を撮ることができなかつた。  
実習の課題は、「都市と人間」というテー  
マで組写真を作るというもので、半年前の  
瑠璃子からすれば難しいものではなかつ  
た。しかし、春の終わり頃から続くスラン  
プのせいで、シャツターを切ることはおろ  
か、ファインダーを覗く気力すら湧かなか  
つた。

八月の日射しは強く、黒いTシャツは汗  
で滲み、首から提げたカメラは時間ととも  
に重くなっていった。埃っぽいビル風が吹  
く中、足早に通り過ぎる人々の間を漂つて  
いると、自分が何をしているのかわからな  
くなり、存在の輪郭がぼやけていくようだ  
つた。そのうち、軽い眩暈に襲われて、近  
くの喫茶店へと駆け込んだ。

冷たいカフェオレを飲みながら、ガラス

の向こうを歩き交う人たちの姿を眺めた。みんな、何を考えて生きているんだろう。いつの間にか、写真のことは忘れて、人生そのものに対する問いが頭をもたげるようになっていった。

瑠璃子が写真家を志すようになったのは、高校時代に本屋でヴィヴィアン・マイヤーの写真集を手にとったことがきっかけだった。その写真家は生前、家政婦として働く傍ら、十五万枚以上の写真を撮り続けたにもかかわらず、発表することなく死んでいった人だった。謎の多い人生と、活きとした市井の人たちの姿に、瑠璃子は深く魅了された。写真が記録であることを超えて、記憶の深い部分と繋がることを知って、自分も人の心を揺さぶるような写真が撮りたいと願うようになった。

沖縄で活動することも考えたが、自分の甘えた性格を鍛え直すために東京で勝負することに決めた。上京してすぐの頃は、

目に映るもの全てを写真に変える勢いでシャツターを切っていたが、センスと技術を兼ね備えた同級生たちに囲まれているうちに、個性のない自分の写真に対して劣等感を抱くようになってしまった。最近では、写真を撮る意味を見失って、虚しさを感じることも多くなかった。こんなところで躓いている場合じゃないのにな。そう思いながらも、蟻地獄から抜け出せない自分に苛立つ日々が続いていた。

結局、提出期限になっても、瑠璃子は課題を完成させることができなかった。写真学校のギャラリーで開かれた講評会では、本木先生が優秀作品を発表して、選ばれなかった生徒たちにも格段の成長が見られると言って激励した。また一歩、同級生たちに後れを取ってしまった気がして、瑠璃子は消え去ってしまいたいような思いに駆られた。

講評会が終わり、教室の隅でぼんやりし

ていると、吉田が「ちよっといいいかな？」と声を掛けてきた。挨拶程度しか言葉を交わしたことの無い、写真週刊誌の編集部に出入りしているという噂の男だった。

「池間さんって、多嘉良島の出身だったよね？」

突然の問い掛けに身構えながらも、瑠璃子は「そうだけど」と答えた。すると、吉田は興奮を抑えられない様子で言った。

「じゃあ、海に猫投げたことあるの？」

「え？　：　：　」

そのまま黙っていると、吉田は左手に持っていたスマホを操作して、くるりと画面を反転させた。そこに映し出されていたのは、瑠璃子がよく知るマユーナギーの一部始終だった。：　：　どうして？　衝撃で言葉を失った瑠璃子を見無視するように、吉田は話を続けた。

「これ、今ネットでバズってる動画なんだけど、多嘉良島って猫を固めて海に投げる

祭りがあるんでしょ？　池間さんも投げたことあるのかなって思って」

「……。私、生まれてすぐ本島に引っ越したから、わかんないな」

やつとこのことで絞り出したのは、苦し紛れの嘘だった。島にいる親戚か友人を紹介してほしいと食い下がる吉田から逃げるように、瑠璃子はギャラリーを出て、廊下の端にあるトイレの個室に入った。三分ほど、全身が心臓になったかのようにドクドクと脈打ち続けた。

いくらか呼吸が落ち着いてきた頃、スマホの音量がミュートになっていることを確かめてへ多嘉良島　猫へのキーワードを検索してみた。すると、最初に表示された動画に「狂気！　南島の猫投げ祭り！」という過激なタイトルがついていて、再生回数はずでに四万回を超えていた。

何、これ!?　唾然としながら再生した動画には、瑠璃子が参加しなかった去年のマ

ユーナギーの様子が映し出されていた。砂川のおじい、秀則おじさん、小学生の千佳ちゃん、海に向かってポーマユーになった猫たちを投げていた。島の歴史と文化を知らない人が見れば、動物虐待の現場と思われても仕方のない映像だった。

コメント欄には、島民に対する誹謗中傷の言葉が並んでいた。投稿者の名前は *nekono-tatari* となっていて、動画のブレ方や画角から判断すると、スマホで隠し撮りされたものである可能性が高かった。混乱するあまり、アルバイトを休もうかとも思ったが、忙しくしているとパニックを起こしてしまいそうで、瑠璃子は自分を鼓舞するように駅前の居酒屋へと向かった。

二・

ホールの業務をしている最中、瑠璃子は

ずっと上の空だった。動画の一件が頭から離れずに、レジの数字を打ち間違えたり、テーブル席を希望した客を奥の座敷に案内したりしてしまった。傍から見ても様子がおかしかつたようで、いつもは厳しい店長の阿川さんに体調を気遣われたほどだった。

午後十時半、アルバイトが終わると、瑠璃子は母親に電話を掛けた。開口一番、動画の話に触れると、「なんか大変なことになるみたいね」と、まるで他人事のよきな言葉が返ってきた。相変わらずのマイペースぶりに拍子抜けしたが、取り乱していないことにひとまず胸を撫で下ろした。母親はすぐに話題を変えて、食生活や生活の詳細について聞いてきたので、瑠璃子はあとで連絡すると約束して電話を切った。アパートまでの道中、照ちゃんと話さなければ、と思った。島の役場に勤める幼馴染みの照彦とは、去年、帰郷を巡って口論

になって以来、連絡を取っていなかった。プロの写真家になるまで島には帰らないと宣言した瑠璃子に対して、照彦はマユーナギーに参加しないという選択肢はないと言って譲らなかった。どちらも頑固な性格で、自分の考えを曲げようとはしなかった。

呼び出し音を十回鳴らしても、照彦は電話に出なかった。まだ怒っているのだろうか。そんなことを考えながらアパートに戻り、シャワーを浴びて髪を乾かしていると、照彦から電話が掛かってきた。さっきまで動画問題の対応を巡って会議をしていたそうで、声は疲れの色を帯びていた。

照彦の話によれば、動画を投稿したのは半年前に移住してきた斎藤という男で、最初のうちは友好的な関係を築いていたが、ある酒の席で島にホテルを建てようと画策するブローカーだということが発覚してから、島民から疎まれるようになった



人物だった。今回の動画は、ホテルの建設計画が頓挫したことに對する腹いせではないかというのが照彦の見方だった。

動画共有サービス会社とやり取りしたり、役場に届くクレームの対応をしたりと、本業以外の仕事が増えて寝る時間が削られていくという現状報告のあと、照彦は「最近どうね？」と聞いた。激務をこなしている相手に個人的なスランプの話は持ち出せず、瑠璃子は「順調だよ」と返すしかなかった。

「こっちはなんとかするから、お前はそっちで頑張れよ」

会話の最後、照彦はそう言って電話を切った。ついこの間まで白球を追いかけていた野球少年が頼もしい社会人になっていくことに驚かすにはいられなかった。そして、直前まで去年の口論を引きずっていた自分がひどく幼く思えた。

ベッドに横になっても眠れず、天井を見

つめながら自分が参加したマユーナギーを思い出した。どの年もそれぞれ印象深かったが、一番記憶に残っているのは、やはり、自分が政人を投げた年だった。

大型の台風が接近していた日、佐良浜の漁船が転覆したという連絡を受けて、父親と清志おじさんは周囲の制止を振り切つて飛龍丸に乗った。翌日、転覆した漁船の乗組員は全員救助されたが、海へ転落した父親だけが帰って来なかった。その年のマユーナギーで選ばれた瑠璃子と母親と清志おじさんは、三人揃って鯨岩を越す大投擲を見せた。マユーナギーがなければ、より深い悲しみの海に沈んでいたのは間違いなかった……。

それからの二日間、瑠璃子は動画の騒動を忘れようと街へ出た。カメラを持って歩き回り、少しでも気になる光景があればレンズを向けた。しかし、何度かシャッターを切ったものの、学校の暗室で現像してみ

ると、ピントが合っていない写真や主題が曖昧な写真ばかりだった。写真には撮影者の精神状態が如実に反映されると話していた本木先生の言葉が思い出された。

考えないようにしようとするればするほど、島のこと気がなくなって、SNSに上がる投稿を確認せずにはいられなかった。複数の写真週刊誌が事実を誇張した記事を掲載して、その情報を鵜呑みにした人たちがSNSで拡散させることで、騒ぎはさらに大きくなっていった。島民が暴力的な悪人に仕立て上げられていく様は、ネット社会の闇そのものを見ているようで、瑠璃子は身に迫る恐怖を感じた。

さらに三日経つと、全国放送のニュースでも動画の問題が取り上げられるようになった。好奇心から聖地・マユー岩の奥へと立ち入るユーザーや観光客が現れて、島民以外の入島を一時的に禁止する措置が協議されているということだった。

大手新聞社の電子版では、県と島にアメリカの動物愛護団体から調査員を派遣するという通知が届いたことを伝えていた。

### 三・

金曜日、瑠璃子は学校に休学届を出して、空港へ向かった。迷いに迷った末の決断だった。だが、ここで帰らなければ一生後悔するような気がした。

飛行機で三時間、バスと船を乗り継いで四十五分。人口百七十人の故郷は、観光客がいないからか、騒動など起きていないかのように静かだった。港に立って、湿った海風と強烈な日射しを浴びていると、島に帰って来たんだという実感に包まれた。

ドラム缶の陰では、猫たちが無防備な姿で横になっていた。三毛猫のチルー、梅千代、タヌ吉は十二歳を超える老猫だったが、

ストレスがないからか、毛並みがよく、若々しい姿を保っていた。少し離れた草むらの前では、寅次郎が新顔たちと鬼ごっこをするように戯れていた。自由な猫たちの姿を見ていると、いつの間にか、肩の力がスツと抜けている自分に気がついた。

「あんたたちは気楽でいいね」

人間のような複雑な揉め事や悩みがない猫たちを、瑠璃子は心の底から羨ましく思った。タヌ吉は言葉を理解しているかのように「みゃー」と鳴いて、梅千代はお腹を上に向けて左右にごろんごろんと転がった。しばらく猫たちと遊んだあと、港から伸びる一本道を実家の喫茶店「さな」へと向かった。

カウンター席で新聞を読んでいた母親は、以前よりも小さく、老けたように見えた。腰を労わるように背伸びをする姿は亡くなった祖母にそっくりで、それがおかしくもあり、せつなくもあった。仏壇に線香

を立て、三十七歳のまま年を取らない父親の遺影に帰郷の報告をした。わがままを言っただけで東京へ出してもらっている以上、早く一人前にならなければと思いを新たにしたら。

少し横になるつもりが、疲れていたのか、たっぷりと一時間近く寝てしまった。香ばしい匂いで目を覚ますと、テーブルの上には大好物のツナサラダとジーマミー豆腐、フリーチャンネルが並んでいた。東京でもチャンネルを作ることはあったが、母親と全く同じ材料を使っても、家の味を再現することはできなかった。黙っていても食事が出てくる幸せを噛みしめながら、瑠璃子は贅沢に魅を乗せたご飯を頬張った。

婦人会の知美おばさんから電話が掛かってきたのは、七時半、公民館で開かれる集まりに行く準備をしているときだった。照彦が熱を出して倒れたらしく、急遽、瑠璃子に代打としてSNSについての説明

をしてもらえないかというお願いだった。力不足ではないかと思っただが、無理をしていた照彦の姿が目には浮かんで、瑠璃子は申し出を受け入れることにした。

公民館の交流室には、島の役員を含めた四十人ばかりの島民が集まっていた。瑠璃子は今回の騒動の経緯を自分なりにおさらいしたあと、SNSの影響力と問題点について知っていることを話した。日常的にスマホを使っている青年会との間では認識を共有できた感触があったが、一番理解してほしい五十代以上の島民たちとは明らかな温度差を感じた。

「僕はね、どうして島の外の人間にとやかく言われたいといけなかったのか、それがわからんのだよ。島の文化を知らない人たちが過剰に非難して、そこに共感が集まるっていう今の時代の空気の方がおかしいんじゃないの？」

奥平村長がそう言うと、他の役員や高齢

者の面々も同意を示すように頷いた。瑠璃子はその考えが正論であること、SNSでは正義感が暴走する傾向にあることを伝えた上で、明日来島する調査員との交渉をどう展開するのか問い掛けた。しかし、役員たちは相手が間違っているのだからまともに取り合う必要はないという姿勢で、意識は早くも酒盛りへと向かっていた。

「瑠璃子、そんなに心配するな。なるようにしかならんよ」

久貝副村長は左手に紙皿を持って、天ぷらに箸を伸ばしながら言った。樂觀しているのか、諦めているのかはわからなかったが、その口ぶりがなんとも頼りなく、瑠璃子はたまらなく不安になった。

「マユーナギーが無くなるかもしれないんだよ！」

思わず感情的になって、瑠璃子は声を張り上げた。

「それはない。絶対にない。俺が保証する」



桃原のおじいちは自分の胸を叩いてみせたが、まさに今、その存続が危ぶまれている状況にあるという認識が欠けているようだった。島の外ではなく、内側に敵がいるような気がして、居た堪れなくなった瑠璃子は公民館を飛び出した。

月明かりの中をパテン浜まで歩いて、砂浜に座ってしばらく海を眺めた。少し気持ち落ち着いてきた頃、宮国のおばあど話をしたくなった。マユーナギーを取り仕切る神女で、島の歴史の生き証人でもあるおばあに会えば、何か知恵を授けてくれるかもしれないなかった。

しかし、向かった先の宮国家では、おばあがついさつき寝たことを次女の美恵子おばさんに告げられた。最近のおばあはすっかり体力が落ちて、八時前にはもう寝てしまうということだった。そのまま帰るつもりでいたが、「一緒にスイカでも食べないね？」と誘われて、断る理由もなく、瑠

璃子は言葉に甘えることにした。

「美恵子おばさんは今回の騒動について  
どう思う？」

東京での生活についての話が一段落したあと、瑠璃子は率直にそう聞いてみた。美恵子おばさんは「うーん」と小さく唸ったあと、本音を語ってくれた。

「この前スマホが出たと思ったら、いつの間にかこんな大事になっているでしょう？ 若い人にはもうついていけないよ。：：マユーナギーもね、私の代までだったらしいけど、いざ続けるとなったら、継承者の問題もあるし。こればかりはね：：」  
具体的な結論が出たわけではなかったが、同じ目線で話ができただけで、瑠璃子の毛羽立った気持ちはいくらか和らいだ。帰り道、空を見上げると、満天の星が輝いていた。こんなとき、お父さんがいればな、と、久しぶりに思った。

四・

翌朝、瑠璃子は散歩の途中にパテン浜のマユー岩へ立ち寄った。

モクマオウの木漏れ日の下では、知美おばさんと裕子おばさんが猫たちに食パンの耳をあげながら談笑していた。二人とも昨日は満足に眠れなかったらしく、話し合いが上手くいきまますようと三人で手を合わせた。その後、みんなで交流室の掃除をして、「さな」でタコライスを食べたあと、午後の便で島に来るミス・トンプソンを迎えに港へ向かった。

十五時半、船から一人で降りて来たミス・トンプソンは、麦わら帽子にサンダラス、猫のイラストが入ったTシャツを着たふくよかな体型のおばさんだった。港の猫たちを見るやいなや、満面の笑みを浮かべ、愛おしむような眼差しを向けた。好戦的な

活動家が来たらどうしようかと心配していた一同は、親しみやすそうな人物の登場に、顔を見合わせて安堵の表情を浮かべた。

「お出迎え、ありがとうございます」

通訳がいないことに対する不安は、ものの数秒で消え去った。ミス・トンプソンは東京で十五年以上活動しているらしく、その外見からは予想できないほど流暢な日本語を話した。

「うちの父ちゃんの十倍は上手いんじゃないかね？」

知美おばさんにはそう言って笑う余裕があつたが、奥平村長をはじめとする役員たちは直立不動の状態で「マイ・ネーム・イズ……」とはじめる頓珍漢ぶりを見せた。ミス・トンプソンは苦笑しながらも、一人ずつ握手して、名刺を受け取った。

宿泊先の民宿「キサパギ」に荷物を預けたあと、一行はぞろぞろと列を作って公民館へと移動した。交流室のパイプ椅子に腰

掛け、話し合いの準備が整うと、ミス・トンプソンはボイス・レコーダーを回して、真剣な表情を浮かべた。

「まずは、私が代表を務めるキャット・ラバーズ・インターナショナルの活動内容と来島の目的について説明します」

そう切り出すと、ミス・トンプソンは簡潔な説明を行った。

キャット・ラバーズ・インターナショナル（C L I）は二〇〇三年に設立された団体で、猫を虐待から守るために活動していること。C L Iは、アニマル・ライツという動物の権利の尊重を理念の柱として掲げていること。今回の来島は、マユーナギ―を法的に禁止する措置を視野に入れた調査を目的としていること。

「何か質問はありますか？」

「法的に禁止するって、マユーナギ―をね？」

久貝副村長は寝耳に水と言わんばかり

の反応を見せた。他の役員たちも大差なく、不意打ちを食らったように目をぱちくりさせた。昨日、何の準備もせずに酒盛りをしていたのは誰ね、と瑠璃子は腹が立った。

この展開を予見していたのか、裕子おばさんは「エミリーさん、ちよつと聞いてもらってもいいかね？」と言って、ミス・トンプソンに傾きかけていた流れを引き戻した。そうして、四十年ほど前に渡久地昭雄教育長が書き残した記録集を見ながら、マユーナギーの概要を説明した。

マユーナギーは少なくとも六百年前から続く祭りで、三年に一度、旧暦の十月の満月の晩に行われること。神女によって選ばれた一人から三人が、魂を抜いた状態の猫に悲しみを込めて海に投げることに。悲しみは海で浄化され、猫は翌日の日の出と共に島へ帰って来ること。

ミス・トンプソンは異文化を理解しようと熱心に耳を傾け、メモを取った。その誠

実な姿勢を目の当たりにして、島民たちは言葉を補い合いながら説明を重ねた。ただ、どう表現しても、ミス・トンプソンは儀式の内容を含め、海に猫を投げるという行為を受け入れなかった。

「沖縄には『命ぬちどう宝たから』という素晴らしい言葉があると聞きました。マユーナギはその考えに反していませんか？ 猫に対して悪いことをしているという罪悪感があるからこそ、島の外の人に知られないように祭りを秘密にしてきたんではないですか？」

この解釈に対して、桃原のおじいは「違う、違う」と手を振って否定した。

「あなたはね、物事を一面的にしか見えないわけ。人間が猫を投げるとするのはその通りなんだけど、別の見方をしたら、猫が人間に投げてもらおうわけ。海に入ることだね、猫は体のノミが取れたり、病気が治ったり、それなりのメリットがあるわけ。

：：大体、投げてもらおう人間を猫が選ぶんだから。これはつまり、持ちつ持たれつの関係で、あなたもね、一回参加してみたらいいんだよ。全部わかるから」

ミス・トンブソンは眉間にしわを寄せた。

「猫が人間を選ぶって：：そんな話、信じられません」

「本当なんだから仕方ないさ。あなた、猫の気持ちができるわけ？」

ミス・トンブソンは腕を組み、理解に苦しむというように渋い表情を浮かべた。そうして、時計が六時半を回っていることに気づくと、集中力が切れたのか、大きく息を吐いて、ボイス・レコーダーを止めた。

「オーケー、今日のところはこれで終わります。続きは明日聞きます。：：お腹がぺこぺこです」



ミス・トンプソンの歓迎会は、公民館の目と鼻の先にある居酒屋「ゆさらび」で開かれた。初日の話し合いが不完全燃焼に終わった。男たちは皆やきもきした様子だったが、女たちは早々と気持ちを切り替えて、料理の配膳や飲み物の注文にきびきびと動き回った。ビーガンだというミス・トンプソンのために、テーブルには特別に作ってもらった卵抜き野菜天ぷらや豆腐ハンバーグが並んだ。

奥平村長から記録係に任命された瑠璃子は、店内を移動しながら歓迎会の様子を撮影した。最初の十数枚は構図がうまく決まらなかったが、シャッターを切っているうちにリズムが出てきて、少しずつ勘も戻ってきた。

「あなたはプロのカメラマンですか？」

ミス・トンプソンにそう聞かれて、瑠璃子は東京で修業中の身であることを説明

したあと、スマホに保存していた写真作品を見せた。すると、千佳ちゃんや婦人会のメンバーも集まってきた、ちよつとしたデジタル写真展になった。島民に自分の作品を見せるのは初めてのことで、「すごい！」、「きれい！」、と褒められると、それが素人の感想であるとはわかっていても、思わず笑みがこぼれた。

「この島や猫の写真はないんですか？」ミス・トンプソンの質問に、瑠璃子はドキツとした。撮っていないことを正直に伝えると、「大事なものはいつも足元にありますよ」と言って、ミス・トンプソンはスマホで撮った猫たちの写真を見せてくれた。どの写真からも技術を上回る愛情が伝わってきて、瑠璃子は自分がいかに教科書に囚われていたかに気づかされた。時間ができたら、もっと自由な発想で島や猫の写真を撮ろうと思った。

仕事とプライベートを明確に分けて考

えているようで、ミス・トンプソンは自分のことをエミリーと呼ぶように言って、話し合いのときとは別人のように振る舞った。酒が強く、ビールのジョッキを続けて四杯空けると、泡盛に切り替えて、炭酸割りを飲みはじめた。それまで遠巻きに眺めていた役員たちも、その豪快な飲みっぷりを目にして、少しずつ距離を縮め、最後には客人を囲んで酒を酌み交わすようになった。

さらに酒が進むと、青年会の俊雄兄ちゃんが三線で「大猫節」を弾き、エイサーでチョンダラーを務める嘉数さんがマーカ―でお腹に猫の絵を描いて即席の腹踊りを披露した。この芸がツボにはまったらしく、ミス・トンプソンは顔を真っ赤にして笑った。

「エミリー、この踊りに免じて許してくれんかね？」

嘉数さんが調子に乗って裏取引を持ち

掛けたが、ミス・トンプソンは「ダメです」と厳しく突っぱねた。

会も終盤に入った頃、知美おばさんがミス・トンプソンに猫の保護活動を始めたきっかけを聞いた。ミス・トンプソンは少し考えるような間を置いて、語りはじめた。

「子どもの頃、私はスノー・ホワイトという名前の白い猫を飼っていました。雪のように白いからスノー・ホワイト。単純でしょう？ とてもかわいくて、品のある、賢い猫でした。私は彼女を愛していました。毎日ハグして、学校から帰るといつも遊んでいました。私は言葉を覚えるのが遅くて、学校でいじめられていたんです。だから、スノー・ホワイトが唯一の友達でした。寝るのも一緒に、両親からは姉妹みたいだねって言われていました。……でも、私が九歳の冬の日、朝起きたらスノー・ホワイトがいなくなっていました。最初はどこかに隠れているのだろうと思って探したけれ

ど、見つかりませんでした。毎日、必死になつて探して、四日目の午後、家の近くの森の中でスノー・ホワイトが死んでいるところを見つけました。動物に食べられたあとの、無残な姿でした」

騒がしかった店内は、いつの間にか水を打ったように静まり返っていた。おしぼりを握り締めながら泣きそうになっている裕子おばさんに、ミス・トンプソンは「ありがとうございます」と囁くように言つて、背中を優しくさすつた。そうして、悲しみに重くなつた空気を軽くするように、少し口調を変えた。

「他の人からすれば、何万匹いる猫のうちの一匹かもしれませんが、私にとって、世界にたった一匹しかいない、かけがえのない存在でした。∴半年ほど立ち直れずに落ち込んでいたとき、母がペット・ロスで苦しんでいる人たちのためのサポ―ト・グループを見つけてきてくれました。

高校卒業後、そこで三年ほど働いて、ドイツや日本でも経験を積んだあと、C L Iに移って、調査員となりました」

日付が変わる前に会はお開きとなり、瑠璃子は一人、酔いを醒ましがてらパテンを歩いた。寄せては返す波の音を聞きながら、ミス・トンプソンを説得するのは不可能に近いような気がした。何か打開策があれば、と思ったが、肝心の妙案は浮かばなかった。

六・

翌朝の話し合いは序盤から熱を帯びた。前日の巻き返しを図ろうと、奥平村長が口火を切った。

「問題は、猫を海に投げるものが虐待に当たるかどうかでししょう？ 違うわけよ。多嘉良の猫は泳げるし、一旦ボ―

マユーになって海の底に沈みはするけれど、次の日には元気になって帰って来るんだから」

ミス・トンプソンはペンの頭で机をコツコツ叩いたあと、言った。

「昨日の話だと、魂を抜いた状態の猫を海に投げるんですよね？　意識がない猫は溺れないんですか？」

「魂が抜けているから、溺れないわけよ」

「その仕組みが私にはわかりません。……必ず生きて帰って来るんですか？」

「それは、まあ……、帰らない年もあったけど」

その発言の直後、年長者たちの表情が曇った。自分が生まれる前、パテン浜のかがり火が消えたり、人間の悲しみが強すぎたりしたことが原因で何匹かの猫が戻って来なかったという話を瑠璃子は聞いたことがあった。マユー岩の近くには、不慮の死を遂げた猫たちのための慰霊碑があっ

た。

ミス・トンプソンは声に力を込めて言った。

「論点がハッキリしてきたと思います。猫が死ぬ場合があるわけですよ？　人間の祭りのために猫の命を犠牲にすることは許されません」

奥平村長の沈黙を埋めるように、桃原のおじいさんが口を開いた。

「前から言っているようにね、猫に込められた悲しみは、海の手によって浄化されるわけ。それがマユーナギーだわけさ。あなたはいつも猫の立場に立とうとするけど、僕たちは人間だよ。人間の世界は白か黒かハッキリ分けられない部分があるでしょう？　不条理があるでしょう？」

「無駄にしている命なんて一つもありません」

ミス・トンプソンはきっぱりと言った。「だから、無駄ではないんだよ」



ここが議論の分かれ目になると感じたのか、知美おばさんも加勢した。

「エミリー、これは共生だよ。この島では猫と人間が一緒に生きてきたわけ。正直言っ、私にもわからないことがたくさんあるよ。でも、マユーナギーはずっと昔から続いてきたわけ。それには、ちゃんとした理由があるんだはず」

しかし、ミス・トンプソンは態度を崩さなかった。

「祭りは人間のエゴです。猫が死ぬ可能性がある以上、皆さんには今後マユーナギーをやめてもらわなければなりません。私は話し合いで解決したいと考えていますが、それができないようであれば、法的な手段を取ることにあります」

そのとき、それまでずっと黙っていた清志おじさんが「ええ！」と怒声を発した。朝まで酒を飲んでいたのか、顔は赤黒く、目が据わっていた。

「アメリカカーよ。お前、この島の人間がどれだけ苦しい思いしてきたかわかるか？

飢饉、マラリヤ、人頭税……津波もあつたよ。それで、戦争。……命を奪って、土地を奪って、今度は俺たちの文化まで奪うんか？ どれだけ奪ったら気が済むんか？」

交流室に棘を含んだ緊張が走った。少しの間があつて、桃原のおじいさんが「清志、言葉が過ぎるぞ！」とたしなめた。

「エミリー、ごめんね」

裕子おばさんが無礼を詫びたが、清志おじさんは止まらなかつた。

「ううん、こんなのに謝らんくていいよ。

……お前よ、小さな島で生きることの厳しさを、考えたことあるか？ ……人に裏切られたり、病気になるったり、大事な人を亡くしたりして……みんな、つらい、悲しい思いをしてきたんだよ。その荒れた、行き場のない心を鎮めるための祭りが、マユーナギーなんだよ。お前のせいでマユーナギ

ーが無くなったら、絶対に許さんからな！」  
「それは脅迫ですか？ ……全部録音して  
ていますよ」

清志おじさんはパイプ椅子を倒さんばかりの勢いで立ち上がると、怯えた顔のミス・トンプソンに近づいて行った。そうして、鷲掴みにしたボイス・レコーダーを床に叩きつけようとしたところを、俊雄兄ちやんと嘉数さんに取り押さえられて、そのまま部屋から連れ出された。

「エミリー、許してね。本当は優しいんだけど、今日はね……」

清志おじさんの苦悩を近くで見えてきた裕子おばさんが、声を震わせながら言った。重い沈黙が交流室を満たす中、島民は下を向いたり遠くの一点を見つめたりしながら、十年前の事故を思い出しているようだった。横に座っていた母親が目頭を押さええるのを見て、瑠璃子は胸の奥が締めつけられたようになった。

知美おばさんの計らいで早目の休憩となり、沖繩そばが振る舞われた。一時間後、話し合いは再開されたが、これ以上議論しても無駄だという空気が漂って、誰も口を開かなかつた。怒りをぶつけられた衝撃が尾を引いているのか、ミス・トンプソンは顔を強張らせたまま、沈黙を続けた。

七・

「あい、なんね……みんな揃って葬式みたいな顔して」

懐かしい声が響いたのは、午後一時半、瑠璃子が何度目かの溜息をついたあとだった。入口を見ると、杖を持った宮国のおばあが立っていた。美恵子おばさんに介助されながらゆっくりパイプ椅子まで辿り着くと、おばあは腰を下ろして、一息ついてから言った。

「来月、特別にマユーナギーをやって、それで終わりにしようと思うわけ」

突然の発表に、その場にいた全員が驚きの表情を浮かべた。一人一人の顔を見ながら、おばあは淡々と続けた。

「今朝ね、夢を見たわけ。羽を怪我した青いトンボがね、私の右の肩に止まったわけ。そのトンボが龍に姿を変えてね、東の空に……」

「おばあは夢の話はあとでいいよ」

半ば苛立つように言った久貝副村長に、おばあは鋭い視線を向けた。

「弘和、あんたは黙ってなさい。年を取って体は悪くしているけどね、頭はまだボケてないよ。これはね、神様からのお告げだよ。間違いないよ」

そうして、ミス・トンブソンの方へ向き直った。

「で、トンボさん。あんたに投げてもらおうからね」

おばあの奔放な言動に圧倒されたのか、ミス・トンプソンは名前を訂正することもなく、しばらく呆然としたままだった。おばあは相手を見据えて、畳みかけるように聞いた。

「あんたは本当のことを知る覚悟があるね？」

「……私は、常に真実の側に立ちます」  
やつとのこととで口を開いたミス・トンプソンは、冷静さを取り戻そうとするかのよう  
に言った。その返事を受けて、おばあは  
頷きながら目を閉じた。

「あんたにはね……たくさんの猫の霊が  
憑いているよ。十匹や二十匹じゃないよ。  
百匹以上。でね、真ん中にいるのがね、黄  
緑色の目をした、白い猫」

「黄緑色の目をした……白い猫？」  
ミス・トンプソンは周りの面々を見回し  
た。顔には、誰かスノー・ホワイトの話  
をした？ という問いが浮かんでいた。しか

し、目の色まで話していなかったことに気づいたのか、深い謎を抱え込んだような表情を浮かべた。

おばあは目を閉じたまま、実際に何かを見ているかのように続けた。

「ああ。この白い猫はいなくなっただね。

：：そうか、あんたのお父さん。：：ジェフリーはベトナム戦争の帰還兵だね」

「：：どうして？」

ミス・トンプソンは目を見張った。

「ジェフリーは情け深い男だったけど、心を病んでいた。：：人を殺した自分が許せなかつたんだ。酒の問題も抱えていたね。

：：幻覚を見てね、夜、あんたの猫を蹴り殺したんだよ。家の近くに森があつたでしょう？ あんたが寝ている間に、捨てに行つたんだよ。冬の、寒い日だったね」

ミス・トンプソンは口を固く閉じ、全てを否定するように首を横に振り続けた。しかし、ある一点に達すると、それ以上こら

えきれないというように両手で顔を覆って、肩を震わせながら泣きはじめた。

「あんたは神にも猫にも愛されているよ。だけど、強情なところがあるから、結婚生活を犠牲にしてきたでしょう？ ……それに、人間を憎んでいる。気持ちわかるよ。でも、憎しみは毒だよ。このままだと、あんたは病気になるよ。 ……投げなさい。あんたが一番マユーナギーを必要としているよ」

「ちよつと、一人に ……。タバコ、もらってもいいですか？」

五分後、ミス・トンプソンは奥平村長からタバコの箱とライターを受け取ると、不確かな足取りで庭に出て、海を見ながらタバコを吸った。瑠璃子には、その後ろ姿が深い悲しみを抱えた少女のように見えた。

一連の流れに水を差すように、久貝副村長が宮国のおばあに詰め寄った。

「マユーナギーを外人なんかにやらせて



いいんか？」

「なんで、同じ人間さ。島人も外人も関係ないよ」

「やらんって言ったらどうする？」

「大丈夫。トンボさんはやるよ。……それで私の役目は終わり。今後のことは、あんななんかで決めなさい」

ほどなくすると、草むらの方から寅次郎が現れて、ミス・トンプソンを中心にぐるぐると反時計回りに回りはじめた。棒立ちになったミス・トンプソンは、自分の周りを歩き続ける寅次郎に戸惑っているようだった。猫が人間を選ぶという、これまでも何度もくり返されてきた光景を目にして、瑠璃子はこの島の神秘の法則が正確に働いていることを再確認した。

満月まで三日と迫った水曜日、マユーナ  
ギーへ向けての準備は追い込みに入った。  
女たちは神に捧げるための御馳走を作  
り、宮国のおばあから神歌の講習を受け、  
ミス・トンプソンと一緒にポーマユーに見  
立てた大根を投げる練習をくり返した。体  
調を回復させた照彦は青年会のメンバ  
ーとパテン浜にテントを張り、かがり火用の  
薪を組んだ。島民それぞれが割り当てられ  
た役割をこなしたが、清志おじさんが浜に  
現れることはなかった。

祭りへと向かう島の風景にレンズを向  
けているうちに、瑠璃子は写真に対する認  
識が変わっていくのを感じた。どの瞬間も  
等しく美しく、全ての現象が一期一会の奇  
跡なのだと思うことが度々あった。新しい  
世界観が開けると、構図にこだわるよりも、  
心のままにシャッターを切れればいいのだ  
と考えるようになった。

祭り当日、マユーナ岩の前に御馳走と酒が

供えられると、身が引き締まるような緊張感が漂うようになった。女たちは白装束に身を包み、シマサルナシの枝で作った冠をかぶって、マユー岩を中心に半円状に並んだ。かがり火に火が灯ると、寅次郎は吸い寄せられるようにマユー岩の台座に飛び乗って、スフインクスの姿勢を保ったまま動かなくなった。

午後七時、太陽が完全に沈むと、宮国のおばあは神歌を唱えはじめた。

マユーヨー

マユーヨー

ツクンパテイマデイ

トウビピーリ

∴  
∴  
∴  
∴  
∴

寅次郎の魂が無事マユー岩へ移されると、ミス・トンプソンは泣きながら寅次郎を撫でた。そのうち、寅次郎は前脚と後ろ

脚を一直線に伸ばした姿勢で固まり、立派なボーマユールになった。

トウビピール

トウビピール

チムノール

ムドウリク

マユール

マユール

マユール

マユール

マユール

マユール

マユール

マユール

マユール

マユール

マユール

マユール

マユール

んと遠ざかり、見事な弧を描いて鯨岩の手前にちやぽんと落ちた。

瞬間、パニックを起こして海へ飛び込もうとしたミス・トンプソンを、女たちは抱きしめるようにして止めた。

「エミリー、大丈夫：：大丈夫だから、信じて待って」

知美おばさんに諭されて、ミス・トンプソンはゆっくりと興奮を鎮めていった。

体調は万全だと言い張っていたおばあは、一時間もしないうちにふらふらと足元が怪しくなった。当初の予想からは二時間近く早い交代だったが、美恵子おばさんは落ち着いて祈りを引き継ぎ、女たちが三十分交代で神歌を唱え続けた。

午前零時、宮国のおばあは力を振り絞って、寅次郎の魂をマユー岩から勾玉の形をした石へと移した。ミス・トンプソンはその石を受け取り、再び女たちの手拍子の中を波打ち際へと向かうと、おばあ「マユ

「ヨー、ムドウリクー！」の掛け声に合わせ、海へと投げ込んだ。祭りが峠を越えたことで女たちは表情を和らげ、御馳走を食べ、酒を口にした。

二時四十分、それまで晴れていた空に雲が掛かると、海から強い風が吹きはじめた。

「雨が降るぞ！ 火を守れ！」

俊雄兄ちゃんの声が浜辺に響くと、男たちは次々と薪をかがり火に投げ入れた。火は大きく膨れ上がって安定したかに見えるたが、一部の薪が湿気っていたのか、数分後に降り出した雨で火は次第に弱く、小さくなっていた。焦った嘉数さんが注いだ灯油も、炎を広げただけで、火を定着させることには繋がらなかった。

最悪の事態が瑠璃子の脳裏をかすめたとき、暗闇から人影が飛び出して来て、燃えている薪を一つ取ってテントの下に置いた。

……お父さん？ 瑠璃子の目には、その

人影が父親のように映ったが、よく見ると、それは父親の形見の雨合羽を着た清志おじさんだった。祭りの場に現れたことに加えて、その姿から並々ならぬ思いが感じられて、瑠璃子は胸が熱くなった。

しばらくして雨が止むと、清志おじさんは黙々と新しい薪を組み直して、取って置いた薪を種火として火を熾した。かがり火は息を吹き返したように勢いよく燃え上がり、暗かった砂浜が一気に明るくなった。それから日の出まで、清志おじさんは額に汗を浮かべながら火の番を務めた。

「あッ、帰って来た！ ……寅次郎が帰って来た！」

六時十五分、千佳ちゃんが指さした方を見ると、輝く朝日を背に、こちらに向かつて泳いで来る猫の姿があった。ミス・トンプソンは泣き笑いの顔で波打ち際へと駆け寄ると、膝をついて、生まれて来る我が

子を迎えるように寅次郎を抱きしめた。瑠璃子は何度も手の甲で涙を拭きながら、夢中になってシャッターを切り続けた。

(了)